
(精神的に)最弱な男の(周りが)最強伝説

片岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（精神的に）最弱な男の（周りが）最強伝説

【Nコード】

N5336Z

【作者名】

片岡

【あらすじ】

ヤンデレなくしてこの作品は成り立たないと言っても過言ではないでしょう。苦手な方は注意。後から登場人物がほとんど病みます。どうしたのお前ら。

此方もモバゲーのほうから引っ張ってきました。加筆修正を加えてありますが、見苦しい点、矛盾点などがありましたら是非ともご一報を。

よくあるような勘違い小説です。主人公と周りの考えが食い違っているあれです。

勘違い要素は後半に近付くにつれ消え失せます。

ブローグ

何処？ 何処！？ 何処に行ってしまったのにいさま！！

暗い暗いお部屋を見渡しても其処には何もなくて、にいさまがいつも使っていらつしゃった毛布だけが寂しく畳まれ置かれていた。毛布を抱き締め、思いきり息を吸う。ああ、にいさまの香りがする。優しくて甘くて、私の大好きなにいさまの香り。

私の大好きなにいさま。私だけのにいさま。私だけの至高の宝石。逃がさない……。

心の中でそう呟いて、くすりと笑う。

絶対に逃がさない。逃がしてたまるものか。

あの宝石は、私だけのものだもの。きらきらきらきら、あの輝きを見れるのは私だけで良いの。誰にも渡さない。

ねえ、にいさま。知っていらつしゃるよね。私、隠れん坊は得意なの。

「シュウカ……、行ってきた」

私の隣で青褪めていたシュウカに命じると、シュウカはキツと鋭く私を睨みつけた。なあに、その目。気に喰わない。決り取ってあ

げようか。

「にいさまを見つけたら、すぐに知らせてね」

「……命令するな！ 私に命令していいのはあのお方だけだ！」

ねえ、喚かないでちょうだいよ。私、五月蠅いの、きらあい。きらい、きらい、だいつきらい。おまえ、死んでしまえば良いのにねでも、私、優しいもの。殺さないでいてあげるね。あなたを殺すのはにいさまがお戻りになられてから。

にいさまの御前で、シュウ力を縊^{くむ}り殺してやるの。にいさま、そうしたらきつと私だけを見て下さるわ。

「煩いのよ……。早く、行つて？」

あの子がどうなつても良いのか。シュウ力を抱き締めてそう囁いてやれば、大袈裟なくらいにその肩は揺れた。

ねえ、嫌よね。だってあなた、馬鹿みたいにあの子のこと、大切に思っているものね。あの子、もうお前を見てくれないのに。

シュウ力は小さく舌打ちをして、姿を消した。

ふふ、うふふ、と抑えきれない笑みが零れる。

「ふふ……。すぐに、見つけて差し上げるね、にいさま」

だから、待っていて。何処にも行かないで。誰のものにもならな

いで。私だけを思っていて。

「あなたは、私だけのものだから、ね？」

そう口に出すことで、にいさまが本当に私だけのものになって下さるような気がする。だから、私、嘘を吐くのよ。いつかその嘘は本当になるけれど。

「ふふふ……、あっははははは！」

プロローグ（後書き）

後からとかそんなこと無かった。最初っから病んでた。

とある男の人生が変わるきっかけ 2011・12月26日挿絵追加（前書き）

あるお姫様の視点。

広大で豊かな土地を持つこの国の名前は、セルリア国。

そして、わたくしの名前はアーリア・フィルニアイル。このセルリア国の姫ですわ。以後お見知りおきを。

今日はあるお祭りがあって、わたくしは城下町に来たのです。

本来ならば、わたくしは城に居なくてはならないのですが……、どうしてもお祭りに来たくて抜け出して来ちゃいました！

あ、でも見つかったら流石に不味いので変装をしているのです。

今ごろ城は大騒ぎでしょうね、お祭りを少し楽しんだら早く戻らなくては……。

騒ぐお父様とそのお父様をなんとか宥めようと四苦八苦する方々の姿が容易に想像出来て、わたくしは思わず遠い眼をしてしまった。

ふと意識を戻すと、何やらやけに周りが騒がしいのに気がついた。お祭りですから、町民たちも浮足立つのはわかりますが、それとは何か違うような……。

「はっ……!!」

も、もしかして、わたくしの変装を見破られた……!?

思わず青褪めると、すぐにそうでは無いことに気がついた。

それは何故か。町民が恐れ慄き広場から離れようと我先にと駆け

出したから。

お酒に吞まれてしまった方がまた騒ぎを起こしてしまったのでしようか……。今日のような日にはよくあってはいけないけれど、よくあることです。

「……よし……！」

ならば、この国の王女としてそんなことを見逃すわけには行かない。わたくしは気合を入れ、すぐ目の前に見えていた広場に急いだ。其処では、暴れる酔っ払いよりも、もっと厄介なことが起きていた。

「おい！ てめえら！！ 動くんじゃねえ！」

無粋な怒鳴り声。到底、この祭りには似つかわしくない。

「この広場に爆弾を仕掛けた！ 命が惜しかったらじっとしてるんだな」

そんな男の怒鳴り声が広場に響く。避難しようとして走り回っていた方々の動きはピタリと止まり、皆恐怖に強張った顔をしている。中には恐怖で泣き出してしまう方もいた。

あの顔には見覚えがある。指名手配の、爆弾魔だ。

この国は、お父様がお治めになられている。だけど、仮にもわたくしは王族。お父様が民を慈しまれるのであれば、わたくしもそうすべき。

今この時、この国の者はわたくしが護らなければ。

震える身体を叱咤し、そう自分に言い聞かせる。ああ、けれど、いったいわたくしに何が出来るというのだろう。

男は暫く辺りを見渡すと、わたくしの後ろを見て乱暴に言った。

「おい、女！ こっちに来い。てめえは人質だ。何かあったときの為にな」

人質……！！ 思わず唇を噛み締めた。何処までも卑怯な手をとる男に吐き気がする。

ああ、どうしよう。どうすれば良い……？

人質に選ばれた方は今にも恐怖で押し潰されそうになっているはず。

せめて、せめて励ましの言葉と、そして時間稼ぎをしなければ！ 城の兵士たちが駆けつけてくるまで……！

……それにしても、どうして、皆さんはわたくしを哀れみの籠った眼で見てるのかしら……。

いつまでも自分のもとにやってこない人質の方に痺れを切らしたのか、さっきよりも大きい苛ついた声で男は怒鳴りつけた。

「おい！ 女！ てめえだ！ てめえ！！ キョロキョロしてねえでさっさと来い！」

後ろを振り向いても誰もいない。

……も、もしかして……、最悪な事態を想定し、たらりと冷や汗が頬を伝う。

わたくしが呼ばれていたのですか!?

> i 3 7 7 4 0 — 4 5 6 0 <

とある男の人生が変わるきっかけ 2011・12月26日挿絵追加（後書き）

爆弾魔のデザインは私が考えたものではありません。

男と姫

ああ、可哀想に。人質だなんて……。

周りの人たちは彼女を哀れむような瞳で見つめている。

そんな目で見ているのだったら助けてやったらどうかと思わないでもないが、生憎俺もその中の一人なので何も言えない。

女の子の顔は長い髪（なんか不自然だし、鬘かも）に隠れて今はよく見えないけど、さっき一瞬だけ見えた。

めっちゃくちや美少女。

多分、この国のアーリア姫様とやらにも負けてない。

本当なら、あんな子は明るい人生を歩めたんだろうな……、なんて。

……なんだか、そんな子が今にも殺されてしまいそうな危ない目に遭ってるつてのに、こんなくだらないことを考えている自分が虚しくなった。

俯いて拳を握る。俺に力があれば、あの子を助けられたかもしれないのに。“れば”なんて考えていたって、どうにもならないんだけれどさ。

「いや……、」

……もしかしたら、こんな俺でも何か出来ることがあるかもしれない。

皆から無視されて目が合えば思いきり顔を逸らされるミジンコ以下の俺でも（なんか自分で言ってて消えたくなくてきた）、何か出来ることがあるかもしれない。

というか、今も無視され続けてる。なんたる。なにこれ。みんな俺に気付いてない。

……まあ、あの子を助けるのには好都合かな、と静かに一步を踏み出した。と同時に女の子を捕まえている男の顔が眼に入る。

「っっ、」

怖あああああ！？ 何あの悪人面！！ 無理無理無理無理！！

俺なんか瞬殺じゃん！！

微妙な体勢で足を踏み出し、その足をまたすぐに戻そうとしたもんだからバランスが少し崩れた。いだああああ！！ なんかでかい石にぶつかった！！

「いつ！ クソツ！ 誰だ今石投げて来やがった奴！！」

男は痛そうに石がぶつかったであろう箇所を押さえ、辺りを見回している。そして、その視線はある方向で止まった。

「……てめえか！！」

え、なんであの人俺のこと見てんの。ちょ、凄い見てくる。え、何これ。

あつ！　もしかしてさっきバランス崩した時にあの石蹴り上げちゃったの！？

うわ何それ最悪！！　俺どうなの！？　殺されるの！？　マジでええええええ……！？

「てめえ！　無視してんじゃねえよ！！」

それできつと俺は曝し首にされるんだ。俺様に逆らった奴はこうなるんだぜ、H A H A H Aみたいな感じで俺は殺されるんだ。……いやあああああ！！

周りが眼に入らないくらい考え込んでいた俺だから、咄嗟に命知らずな返答をしてしまった。

「つつるさい」

「なっ！？」

俺は今、たいっせつな考え事してんの！　ちょっと黙ってて……、えっ……？

一瞬にして静まり返った広場。もともと静かだったのにもっと静かになっちゃったもんだから、俺の呼吸の音ですら無駄に大きく聞こえる。

嘘だろ……？ 気付いたときにはもう遅い。俺のこの口はとつくに無礼極まりない言葉を発した後だ。

ああああああうるさいなんて言っちゃった！

どうしようどうしよう！ 犯人さん怒りでブルブル震えてらっしゃる！！ 俺は怖さでプルプルしてる！！ ついに俺はスッパリ（ドカンと？）やられちゃうんだ！！

何故か真っ青な犯人さんは（怒りを通り越して殺意までいくと顔が赤から青になるんだろっね、きつと）人質にされた女の子を抱えたまま、俺に向かってナイフを振り上げた。やあめてええええええ！！！！

「じ、このっ！」

恐怖が極限にまで達したとき、俺の足は“立て”という脳からの命令に反した行動を取った。

……うん、つまり足からガクンと崩れ落ちたんだよね、俺。

さすがにこんな公衆の面前で無様にすっ転んだ日にはもう二度と外には出れないからなんとか踏み止まる。これ、結構簡単に言ってるけど実際俺かなり必死だったから！！

ヒュン、と何かが頭の上を通り抜けた気がした。だけど今の俺にそれを気にする余裕なんてない。

ぬああああああ！！ こけてたまるかアアアツ！！ 気合を入れる為に右腕を高く上に突き出した勢い良く立ち上がる。その瞬間何か硬いものが俺の手に激突してきた。

「ぐあっ！」

「きゃ、」

痛ああああ！！ 拳痛い！！ またなんかぶつかったよ！ なにこれ！？

俺が拳の痛みに密かに身悶えていると、何故か爆弾魔さんの身体は傾いた。え？ 倒れてんの？ なんで！？ と、とにかく避けな
いと！

そう思った瞬間、俺の眼に地面に倒れ込みそうになる女の子が飛び込んできた。

あああなんかあんな綺麗な子に傷がつくなんて俺が個人的に耐えられない！！ 必死こいて女の子を支える。柔らかな重みが俺の腕に伝わった。

「、大丈夫か？」

「は、はい」

消え入りそうな声で女の子は頷いた。それなら、と俺は女の子から少し距離を取った。いつまでも俺が触れてたら女の子が穢れちゃうもんね。

うーん、それにしても、よく見れば見るほど美少女だ。なんか高貴な顔立ちしてる。

（あれ……）

ふと、俺は女の子の肩についた黄色の何かに気付いた。よく見て

みるとそれは鳥の羽根だった。向日葵みたいな明るくて綺麗な黄色。もしかして、この羽根の持ち主って城の庭によくいるあの黄色い鳥かな。

この国の王様は非常に寛大な人で、（普通は有り得ないだろうけど）城の庭を一部、一般市民に公開している。

普通に出入りが出来るし、兵士さんに一言伝えれば咲いている花を持ち帰っても良いんだそうだ。

俺も入ってみたかったんだけど人がたくさんいて怖くて入れなかった。それで未練がましく遠目から見てたときに、城に黄色い鳥がいるのを見つけたんだよね。

此処ら辺では飛んでるのは全然見かけないし、多分城にだけいる鳥（飼われてるのかな）なんだと思う。

そんな鳥の羽根が女の子の肩についてるってことは……。考えながら俺は羽根を取ってあげようと手を伸ばした。

「城から出てきたのか……。いけない子だな」

あの鳥、多分城から脱け出したんだな。迷子になったらどうするんだろう。……俺みたいな阿呆じゃないんだからならないか。

手に取った羽根を放し、地に落とす。

感じた熱い視線に顔を上げてみると、女の子は酷く驚いた顔をしていた。

ええ！？　なんで！？　あれかな。俺のあまりの不細工さに驚愕したのかな。“こんなに醜い生物がこの世に存在していたなんて……！”　みたいな。

……やめよう、考えてたら心が痛くなってきた。

特に何も言うこともないので黙りこむ。なんだか気まずい沈黙が流れている気がする。逃げ出したい。

「……それじゃあ、俺はもう行く」

「あ、待って下さい！ ああ、お名前は……」

えええっ！？ 俺なんか名乗るほどの者じゃないって！！ ていうかただビビってただけの俺の名前訊いていったいどうするつもり！？

後ろで女の子が他にも何か言ってた気もするけど、俺は恥ずかしかったからすぐに逃げた。

突き刺さる周りの眼が痛いよ！！

男と姫（後書き）

文が乱れてますな。

この小説を書き始めたのは実は小学五年生の頃だったりします。

そのときからだらだらだらと続けておりまして。あ、どうしてもいい？

SIDE アーリア

どうすれば……！

焦りと不安が心の中からべちゃりべちゃりと這い出て思わず叫びそうになる。

だけど、この男に弱みを見せてはいけない。少しでも隙を見せれば、すぐに付け込まれる。

そして、何よりわたくしは王女なのだから。そんなちっぽけなプライドがわたくしの理性を寸でこのころで繋ぎとめていた。

（慌てては、駄目）

そう、今は落ち着かなければならない。

こんなときこそ冷静に、そして確実な突破口を見つけなければならぬのだ。

ああ、だけど、いったいどうしたら良いの？

首元で構えられたナイフのせいで身動き一つ出来ないし、わたくしがこうして人質になってしまっているのだから皆は手出し出来ない。

何も出来ない無力な自分に涙腺が緩みかけたとき、何かが此方に飛んできた。

っ……石！？

飛んできた石は見事なコントロール力を披露し、男の頭に命中し

た。痛みに頭を押さえ、次いで羞恥と怒りに顔を赤く染め上げる。

何を馬鹿なことを！

わたくしは、そう怒鳴り散らさなかったのが、不思議なほどだった。

この男はナイフを持っている。それに加えて広場に仕掛けられたという爆弾。それを起爆させるかどうかはこの男が握っている。迂闊なことをすればどうなることが……！

「いったい誰が……！」

愚かな者の顔を拝んでやろうと顔を上げた瞬間、時間が止まった気がした。そう感じたのは、きつとわたくしだけではないだろう。

艶やかな少し長めの黒髪。切れ長の赤い、紅い瞳。白い肌。細いけれどちゃんと筋肉のついた体。人形の様に整った顔。

余りにも整い過ぎた彼に暫しの間見惚れていた男だったが、すぐに気を取り直したように喚き散らした。

「っ！ て、てめえ！ 無視してんじゃねえよ……！」

その言葉に、彼は小さく一言。

「うるさい」

「なっ！？」

たった、それだけ。たった一言だけの言葉だと言うのに、それはとても冷たくわたくしは言い知れぬ恐怖を感じた。一瞬で、この場は彼に支配された。

あの方はわたくしたちが怯えているのを感じ取ったのだろう。（逆光で表情はよく見えないけれど）小刻みに、心底可笑しそうに体を震わせていた。

声を出さずに笑うなんて、なんてこの方らしい

「こ、このっ！」

恐怖に耐えきれなかった男は、己を励ますように態とらしく大声を上げ、彼のほうへ向かった。

顔は真っ青で身体をガタガタと震わせ、情けないはずなのに、あの方の前ではそれも仕方ないと思ってしまう。

そして、それを嘲笑うかのようにあの方の身体の震えがより一層大きくなった。

馬鹿な奴め、と声に出してこそいないけれど、そう言ってるように聞こえた。

ああ、馬鹿な人ですわね。あの方が呆れた顔をしているのに気付かないなんて。

ああ、愚かな人ですわね。あの方に勝てるものなんてこの世に存在するわけがないですのに。

ああ、わたくしも馬鹿で愚かですわね。あの方の冷たい瞳の中にチラリと映っただけでも体中が震えあがるほど嬉しいだなんて！

視線が一瞬だけ交わった気がして、それさえにも恍惚のため息を吐きそうになる。

ああ、なんて幸せなのだろう！ この御方の御前に在ることを赦されるだなんて……！！

男は愚かにもナイフを振るい、彼に攻撃を仕掛けた。しかし、その攻撃は容易に避けられ、男は彼の反撃を受けた。

どごつ、と鈍い音が聞こえて、そして傾いていく身体。

「きゃ、」

まずい。なんとも言えない感情が背を駆け抜けた。

咄嗟だということもあるけれど、そもそも非力なわたくしが大人の男の全体重を支えられるわけが無い。そのまま男と共に身体が地面に近付いていった。

遅い来る痛みに備えて全身に力を籠め、目を固く閉じる。

しかし想像していたそれは来ず、代わりにやってきたのは軽い衝撃。いつまで経っても痛みはやってこない。

恐る恐る目を開けてみると、あの方の端正な御尊顔が目の前にあった。

「……大丈夫か」

冷たくも優しいそのお言葉に返事をする。彼はその切れ長の瞳を僅かに緩ませたように見えた。

不意に、彼が手を伸ばし、わたくしの肩に触れようとする。

あ、ええっ！？ な、何をなさるおつもりですか！？ まさか、あの、お姫様を救出した際には欠かせないあの王道イベント……！？
しかし、彼の手はすぐに離れ、その手に握られていたのは……。

（は、ね……？）

「城から出てきたのか……。いけない子だな」

黄色い羽根。美しいそれはお父様が気に入って商人から買い取った鳥のものだ。普段は庭に放してある。

城から脱け出す前に少し戯れていたから、服についてしまったらしい。全く気が付かなかった。

あの鳥は、城から出てはいない。城から出られるはずがない。専用の調教師がよく躰をしているから。

つまり、彼の言葉は、

（わたくしに、向けられたもの）

国民にこれ以上の混乱を招いてしまわないように、敢えてぼかされたその言葉。

当たり前のように吐き出されたそれに、驚きだなんて感じなかった。

だって、彼にとってわたくしの変装を見破るなんてとても容易なことなのだ。きっと、彼の前にはどんな小細工も通じない。

改めて感じる圧倒的な実力に、恐れを通り越して感激する。

「……………」

思わず黙り込んでしまうと、彼は不意に仰られた。

「それじゃあ、俺はもう行く」

彼の背を見ただけなのに、わたくしは迷子になってしまったときのような不安を感じた。

待って、行かないで……！

「！ あ、待って下さい！ あの、お名前は……」

せめてお名前だけでも。そう思って投げ掛けた言葉は彼の方には届かず、そのまま行ってしまうわれた。

柄にもなく声を張り上げもしたのだけれど、振り返りもして下さらなかった。

ああ、酷い、酷い。酷いお人。

でも、でも……、またお会いできるでしょうか……。

思わず憂いのため息を吐き、まるでそれがお話で読んだ恋に悩む少女のようで、一人赤面した。

ちなみにわたくしが城から脱け出したということはばれていませ
んでした。

良かった良かった。このまま黙っていようかしら。

SIDE アイリア（後書き）

王道イベントってのはあれです。接吻です。

色々阿呆な子なんです。思考がぶっ飛んでるんです。それでも登場人物の中ではまだマシなほうなんです。

男、捜される

ぶらぶらと特になんの目的も無く町を歩く。ふう、とため息を吐き、なんとなくほのぼのとした気分になった。

平和って良いなあ……。

……あ、ところであの人質にされてた女の子、本当にお姫様だったらしいんだよね。

驚きの新事実！ 通りで可愛いと思った。

あと、人質にされてたときに助けてくれた人がいたらしくて、その人を探してるんだって。

で、その人（男の人なんだって）は名前も言わずに何処かに行っちゃったらしい。

……うん、直接聞いたわけじゃないんだよね。歩いてたらちょうどそんな話が耳に入ってきただけなんだよね。

俺とお話してくれるお友達なんて一人しかないからさ！

なんでかみんな俺のこと見てヒソヒソ話し出すし、顔赤くしたりするし。

そうですね！ 俺の不細工な顔見て顔赤くするほど怒ってるんですよね！

ああ……、噂に聞く男の人ぐらい俺にも勇気つてものがあつたら今ごろ友達五人くらいは出来てたかなあ……。

いや、五人なんて欲張らない。三人、三人で良いから……！！

俺がそんなことを考えていると、突然背後から声をかけられた。

「あなたは！」

「……？」

振り向き、思わず疑問符を飛ばす。誰、この人。鎧着てるし……、城の兵士？

城に知り合いなんていないんだけど。寧ろ話しかけてきてくれる人いないんだけど。

ちよつと頭が混乱しかけてきた頃にお兄さんは声を張り上げた。

「おーい！！ 皆！ 見つけたぞ！ きつとこのお方だ！！」

あんまりにも大きな声をいきなり出されたから吃驚した。そして、その言葉の内容にも吃驚した。

なに？ なんの話？ このお方って誰？ 俺のこと？ え？ なんだ？

「姫様が言っていた特徴と酷似しているし、それに……、」

ねえ！ ねえ！！ いやいやいや！！ 待つて！ 待つて！
とりあえず待つて！！

え！？ 何事！？ 何が起きたの今！！ なんかすっごい怖い顔
の人達がこつち来るんだけど！！

兵士 は なかま を よんだ！

兵士B が あらわれた！

兵士C が あらわれた！

兵士……、カエデ は 混乱 し、こんなこと考えてる場合じゃないだろ！！ 駄目だ今の俺ホント混乱してる！！

思いつきり慌てていると、お兄さんはそんな俺に構う様子を一切見せずに口を開いた。

「あの、少しよろしいでしょうか？」

よろしくありませんけど何かああああ！？
で、でも答えないともしかしたら“バツサリ！” っていう展開になりそうだし……。

「何か用ッ、か」

カミカミ王子が降臨なされたぞおおおお！！！！

どういうこと！！ どういうことなの！？

つまったよ！ 今めちやくちやつまったし、かんだよ！？ なに、死ねば良いの？ 消えれば良いの？

どうしよう！ お兄さんの俺の印象が“敬語も使えない醜男^{みにちこ}”に確実に固まっちゃったよ！

見た目ですでにマイナスなのに更に評価下げて何がしたいの！？
今のお兄さんの俺に対する評価は奈落の底だよ！！

お兄さんは（不快からか）眉を寄せ、静かに言った。

「貴方に城に来ていただきたいのです」

なんで！？ 俺遂に御用！？ なんかしたっけ！？ 俺の存在自体が罪ですか！？

どう答えても俺にとって悪い方向に行っちゃうような気がすると思わず黙り込む。そんな俺をじっと見つめるお兄さん。

やめて！ そんなに睨みつけないで！！

「……………わかった」

！！

恐る恐るそう返事を返した途端、俺は重大な間違いを犯したことに気が付いた。

け……………敬語にすんの忘れてたああああ！！

SIDE 兵士

昨日、姫様が王様に珍しく我儘を仰られていた。

……いや、あれは我儘のうちに入るのだろうか。王様は初めて我が儘を言われた、嬉しい等と騒いでいたが。

私はあんなに喜ぶ王様がなんだか哀れに思えて何も言えなかった。常日頃から思っただが、王様は余り姫様から頼りにされていないのだろうか。

私が王が逃げ出さないように見張っていた（近衛の本来の仕事はこんな間抜けなものではない、はずだ）ときだ。

姫様が何処か思い詰めたような顔つきで王座の間においでになられた。

「お父様。少し、わたくしのお話を聞いていただきたいのですが……、お時間大丈夫ですか？」

王様は少し驚いたような顔をしながらも、嬉しげに顔を綻ばせた。王様は酷く子煩悩である。それに最近、御家族と触れあえる時間が少なかったのもあるのだろう。

「うん。最近は忙しくて構ってあげられなかったけど、僕の仕事もようやく一段落ついたからね。大丈夫だよ！」

王様がそう仰せられると、姫様も安心したように表情を和らげ、話を切り出した。

「あるお方を、探していただきたいのです」
「あるお方？」

思いも寄らぬ要求に王様は鸚鵡返しにお訊ねになった。姫様は頷き、続けられた。

「先日、お祭りがあつたでしょう？」
「え？ あ、ああ、あつたね」

突然の話題転換に戸惑いながらも王様は頷いた。姫様の視線が気まずげに王様から逸らされる。少しだけ嫌な予感がした。

そつえば、祭りのとき姫様についている侍女が何やら慌しかったような気がする。

生憎私も王様も祭りの管理やその他諸々の仕事に追われてその事態を把握するまでには至らなかったが。

意を決したように姫様が御顔を上げられた。

「お気づきになられていらっしやらないならば黙っていようとも思ったのですが、……正直に、言いますね。わたくし、その時に城から抜け出してしまったんです」

気まずげに吐き出されたその言葉に王様の表情が固まる。

姫様を御叱りになろうと思ったのだろうか。椅子から腰を浮かせて、またすぐに座った。このお方に自分の子供が叱れるわけがないのだ

「ま、まあ、過ぎちゃったことは仕方ないし……、うん、許してあげる」

「あ……ありがとうございます!!」

姫様はパツと表情を輝かせた。それを見た王様の頬はゆるゆるに緩んでいる。こんなだらしない顔は下の者には見せられないな、と内心呟いた。

しかし、いくら忙しかったとはいえ、姫様に城を脱け出されてしまうとは、なんということだ。

警備を強化しなければならぬかもしれない。もし“逆”があったら困る。

「それで……、そのお祭りの時にちょうどお城に引き渡された賞金首の爆弾魔がいたでしょう?」

「うん、いたねえ」

ああ、そういえばそんな者がいたな、と記憶を手繰りよせる。確か広場に爆弾を仕掛けたところを素性の知れない男にこてんぱんにやられてしまったのだとか。

正直、私は爆弾魔よりもその素性の知れない男のほうが怪しくて堪らない。

「それでわたくし、その爆弾魔に人質にされてしまつて……」
「な、なんだつて！？　それで、怪我は無いのかい……？」

顔色を変え、今度こそ椅子から立ち上がった王様は姫様に近付き、怪我が無いかを調べるような仕草をした。

姫様は王様の鬼気迫るような表情に驚いたのか、きよとした顔をして、それから嬉しそうに微笑んだ。

王様はそんな姫様に気付いて不思議そうな顔をしている。
微笑ましい光景だ。

「大丈夫です。その時にわたくし、さっき言つたあるお方に助けていただいたので。それで、そのお方にお礼を言いたくて……」
「……そうかい。そういうことなら……」
「というのは建て前で」

心得たといったふうな王様の顔が、もう一度疑問の色に染まる。
姫様は頬を染め、愛らしく微笑んで言つた。

「実は、もう一度そのお方に会いたいというのが本音なんですけれど」

その言葉を聞いた途端、へにやりと王様の眉が下がった。少しだけ、目が潤み始める。貴方はいつたい今年で幾つになるのかと小一時間ほど問い詰めた気分になった。

「……遂にアーちゃんも僕のもとを離れていつてしまうのかい？」
「……お父様？」

姫様が怪訝そうな顔で王様の顔を覗き込む。瞬間、王様はがばりと姫様を抱き締めた。姫様の息を呑む音が聞こえた。

「僕ッ……、アーちゃんをお嫁に出したくないいいいい！！」

耳元で叫ばれたものだから少し五月蠅そうにしておられたが、王様の発せられた言葉を理解した途端、目を見開き怒鳴った。
姫らしからぬ行動だ。あとで世話係に言いつけておくか。今度姫様にお会いしたときに怨み言を吐かれてしまつかもしれない。

「およっ……！？　ち、違います！　そんなことにはなりません！　勝手に突っ走らないで下さいまし！」
「でもアーちゃんはその人の事好きなんだろう！？」

図星をつかれた姫様の頬が林檎のように真っ赤に染まる。

「なっ、……！ えと……。とにかく！ その方を探していただきたいのです！！」

納得が行かないといったように唸る王様。子供ですか、みつともない。そんな真似はやめていただきたい。

王様と姫様の視線が交わる。どちらも目を逸らさない。

先に折れた王様が、ため息を吐かれた。

「……アーちゃんをお嫁には出したくないけど……。仕方がない、探してあげるよ」

「だから違います！！ えっと、それで特徴は……」

姫様もお年頃であらせられる。私もまだ年端も行かぬが、娘を持つ身。可愛いから離れたくないという気持ちも少しはわかるが、良い年なのだからいい加減子離れをしていただきたいと思う。

だが、これは良い。姫様に好いた者が出来た。なんと素晴らしい。これを期に少しは王様に落ち付きというものが出てくるかもしれない。

必ずや姫様を助けたというその男を探し出し、御前に連れていかねば。

「とは言ってみたものの……」

ため息を吐き、ぐるりと辺りを見回した。

こんな大きな国から、たった一人の男を探すというのも、な……。あの祭りは結構大きくて有名なものであるし、遠いところからわざわざ見に来る人間もいるほどだ。本当に見つかるのだろうか？
そもそもあの男が国内の人間だという保障もない。

まあ、とにかく探すだけ探してみようとふと前を見ると、男が私の目の前を通った。

ただの男だったら特になんとも思わない。そのまま捨て置く。
しかし、彼はただの男ではなかった。一般人とは明らかにオーラが違う。

そして何より、驚くほど綺麗だったのだ。
男に綺麗などという表現はおかしいかもしれないが、それ以外にどう表現して良いのかわからない。

恐ろしいほどに整った容顔と、黒髪紅目。
間違いなくこいつ……、いや、この方が姫様の言っていたお方だ。
彼は私に気が付くことなく、そのまま雑踏の中へ消えて行こうとしている。

行ってしまう！ そう思った途端、私は言い知れぬ不安に駆られ、この口は勝手に動いていた。

「あ、あなたは！」

「……」

訝しげに彼は私を見た。当たり前だ。初めてお会いしたのだから。だが、この方に私というものが存在しているということを知られていないというのが、とても苦しかった。

私はそんな気持ちを誤魔化すかのように、彼を見つけたということとを皆に伝えた。

暫くして皆が集まり、神をも超越したようなその存在に息を呑む。姫様が仰せられていた特徴全てに当てはまる。それに……、彼の前で言いかけた言葉を、心の中で呟く。

オーラが、一般人のものではない。姫様がお会いしたという彼で間違いは無いはずだ。

「……」

「っ、あ」

ひくりと喉が引き攣り、小さく声を漏らした。彼の柳眉が歪められたのだ。それも一瞬の事だったが……。

彼を、怒らせてしまった……？

恐怖と寒気が襲い、身の毛がよだった。

彼の方の怒りに触れてしまうなど、これ以上恐ろしいことはない。

彼に敵う者はきつとこの世界の何処にも存在してはいないのだ。

（いや、存在するはずがない）

彼に逆らって良い者はきつとこの世界の何処にも存在しては居ないのだ。（いや、存在して良い筈がない！）

ああ、どうすればいいのだろう！ 私など彼の前には塵にも等しき存在だろう！

「っあの、少しよろしいでしょうか？」

「……何か用か」

明らかに不愉快だとも言つようなその反応。

ああ……！ 怖い、怖い、怖い、怖い！！

今すぐ気を失ってしまいたいほどだった。だけど、この方の前で、そんな醜態を晒したくは無い。

「あな、たに城に来ていただきたいのです……」

ずっと喋り続けていないと、恐怖に吞まれ、身動きが取れなくなつてしまいそうだ。酸素が足りなくなつてしまつたかのように頭がくらくらする。

私を絡め取るその恐怖がじわりじわりと足元から這い上がり……、

「わかった」

その言葉を聞いた途端、何かから解放されたような、そんな気がした。

フツと息を吐く。いつのまにやら止めていた呼吸を再開し、少々荒くなってしまった息を整える為に、胸に手を当てた。

彼が、城に来て下さる。良かった。断られたときには、どうなっていたらだろうか。

……いや、わかりきっている。あの美しい方が拒んでも、私はきつと連れて行くこうとしていた。

そんなことをしたら、私は彼に殺されていただろう。

S I D E 兵士（後書き）

長い？

今回は勘違いというよりもその男の持つ雰囲気圧倒されただけで感じですね。

いやあ、勘違いもの書いてると痛々しい表現使っても多少は見逃してもらえるから楽しい楽しい。

主人公の名前は次回出る予定。普通は一話から出すよな。

男と王

僕の愛しい娘が先日、爆弾魔に人質に取られてしまったらしい。そんなことを後から聞かされて、僕は大幅慌てた。

幸いなことに勇気ある若者に助けてもらえたらしく傷一つ無かったが、それでも心配なものは心配だ。子を持つ親ならば仕方ないだろう。

「王様！ 姫様が言っていたと思われる方をお連れしました！」

「ホント？ ご苦労様。下がっていいよ」

「はっ！」

可愛い僕のアーちゃんを助けてもらったことには本当に感謝している。だから、僕はその若者に褒美を取らせようと思った。

その子が望むなら出来る限りのものは叶えてやりたい。

娘を助けてもらったっていうのに、褒美だけ取らせてはい終わり、っていうのは何か気が引けるけども、何もしないよりはましだろう。

……多分。

さて、あの子が言っていた子は、どういう子なんだろう？

爆弾魔を一瞬で倒したっていうくらいだから、きっと物凄く強そうな、如何にも屈強の戦士っていう感じの子なんだろうな。

僕の頭に思い浮かんだ筋骨隆々、幾度もの闘いで負った傷跡を至るところにつけた男。

……こ、こんなの来たら失礼だけど、なんかやだなあ……。

「あれ、でも……、」

でも、アーちゃんは随分綺麗な子だと言っていた気がする。あ、どっちにしる性根は優しい子に違いない。そう考えると楽しみだ。

横に控えているアーちゃんを見ると顔を真っ赤にしながら、熱心に入口のほうを見つめていた。

なんだか寂しくなって思わずアーちゃんに目隠しをする。怒られた。

でも、この子がこんなに待ち望む子って、本当、どういう子なんだろう。

期待に胸を膨らませていると、視界の端っこのほうで扉が開くのが見えた。

ああ、来たのか。伏せていた目を上げ、思わず見開いてしまった。

「……」

かつん、と床と靴がぶつかりあう、渴いた音が響いた。

生きているものなど存在しないかのような、異様なほどまでに静まり返ったこの場に、靴の音はとても大きく聞こえた。

自分の呼吸の音が嫌に耳につく。

見開いた中心に彼が映り、予想以上だった、と。

僕が思い描いていた想像なんて馬鹿げていると怒鳴りつけたくらい、その子は綺麗だった。

綺麗っていうか、うん、あの……、もう、……ああ！……自分の語彙力の無さに思わず泣きたくなる。

でも、きつとどんな高名な詩人でも、あの子を表すのに相應しい言葉を見つけれやしないんだろう。

「……………」

ほう……、と思わず息を吐いた。アーちゃんも、同じく。

ああ、あの子は、神がこの世にやった遣いなんじゃなからうか。そんな馬鹿な考えまで思いつく。

でもそれはあながち間違いじゃないのかもしれないな、と思い直す。だって、彼はそれほどまでに美しい。

かつん、もう一度靴が鳴った。

「っ、あ……！」

ようやく、自分が硬直し、間抜け面を晒したままだと気付いた僕はすぐに取り繕うように笑ってみせた。

もう遅いだろうけど、馬鹿みたいに動揺したことを悟らせないように、出来るだけ平然としたように、気安く話しかけた。

「ねえ、君がアーちゃんの言ってた子かな？」

そう言って、この子はアーリアのことを知っているんだろうかと疑問に思った。少し間を置いて、一言付け足す。

「あ、ちなみにアーちゃんっていうのは、僕の横に居る可愛い可愛いこの女の子のことね」

「お、お父様っ！ あの方になんて失礼な……！！」

自分でもよくも此処まで口が回るものだと思う。だけど、きっとこれは人間の中に少しだけ残っている獣の防衛本能なのだろう。話し続けていなければ、吞まれる、魅入られる。戻れなく、なる。しかし、それでも良いと思ってしまふ僕は、すでに彼に堕ちているんだろう、なんて思ってみたり。ああ、じゃあ戻れないね。

「さあ……」

上げられた口許。それは、笑みというにはとても冷た過ぎるものだったけれど。

一国の王と姫を前にして、この無礼なふるまい。

でも、この子には丁寧な言葉使いとかそういうのは似合わないなと思った。寧ろそんなもの壁を隔てられたみたいで、嫌だ。

「あ、僕の名前はウィルザ・フィルニアイル。君の名前はなんてい

うの？」

「っわ、わたくしはアーリアと申します！」

良かったら教えてくれる？ 気安くこんなこと言っていたって、本当は物凄く緊張してる。ねえ、教えて。早く知りたいな、君の名前。

彼は暫くしてから、ゆっくりと形の良い唇を動かした。

「……カエデ。カエデ・クレハ」

その名を聞いた途端、なんて言うのかな。凄く、耳に馴染んだんだ。しっくりきたっていうか。ああ、とっても綺麗な響き。

「、カエデくんか。良い名前だね」

「カエデ様……ですか。良いお名前ですわね」

僕とアーちゃんが同時に言った。これはくだらない社交辞令だが、そんなものじゃない。本心からのものだ。鮮やかな紅い瞳を持つ彼にぴったりの名前。

……彼の顔がちょっと緩んだ。嬉しかったのかな？ 今度は、さつきみたいな冷たいものじゃなくて、すごく綺麗な笑顔。名前を褒めただけで嬉しがってくれるだなんて、意外と子供っぽい可愛いところあるんだなあ、とちょっと微笑ましくなる。

ああ、アーちゃんあの顔、直に見ちゃったんだね。顔が真っ赤だ

よ、可愛い。ちょっと微妙な心境だけでも。

……でもさ、嫉妬よりそれ以前に、その気持ちが分かっちゃったんだよね。

だって、あの子と同性であるこの僕までもが、あの笑みに見惚れてしまったのだから。余裕ぶってみたって上がる顔の熱は誤魔化し切れない。

ポーカーフエイスの練習とかしたほうが良いかもね。こんな自分の思っていることを表情に出していたら大変だ。

「俺は、何故呼ばれた？」

「ん？ 君がアーちゃんを助けてくれたって言うからさ、お礼をしなくって」

にっこりと笑ってみせると彼はゆるりと首を振った。

あ、あれ……？ もしかして、僕からの施しなんて受けたくないってこと、かな……。

「……そんな大したことはしていない」

「……あ、いや、君はそうかもしれないけどさ、」

あ、そうじゃなかったみたい。

押し寄せる安堵からちよっただけ気が緩んだ。

というか結構遠慮するなあ、君。僕が良いって言ってるんだから、お礼、受け取ってくれば良いのに。

「僕にとっては大切な娘を助けてくれたヒーローみたいなもんだから」

あ、迷ってる、迷ってる。よし、駄目押し。【秘儀・仔犬の目】！説明しよう！これは美形、もしくは小動物属性の人間にのみ許される技だ！これを場面によって使い分ければ敵を作ることはないゾ！

ただし技を使う側の人間の年齢が上がるほど効果は下がっていくので注意しよう！

ちなみに僕は麗しのお姉様方によく活用してたかな。おかげで上手くこの世界を今まで生き抜いてくれました。いいい。

でも、この間、息子に使ってみたら踵落としされちゃったよ。そんなに気持ち悪かったかな。僕、実年齢より凄く若く見られるからまだイケると思ったんだけどなあ。

「ね、駄目……かな？」

技を披露しながら言葉を吐き出してみたところで気が付いた。

あれ、これやばいんじゃないかな、僕。カエデくんにも踵落としされちゃうんじゃないかな。

そんなことされたら一週間くらい軽く引き籠もる自信あるよ。

「……わかった、良い」

杞憂だったみたいだ。心底安心した。カエデくんは諦めたように目を伏せ、そう言ってくれた。

うん、まあ、カエデくんみたいな綺麗な子だったら、それはそれで新しい世界の扉が開けるのかもしれないね。僕は僕の可愛い奥さんとしか開く気ないけど。

ああ、でも良かった！　これでお礼が出来る！　……ってのは、ただの建て前かな。この神のような存在の彼の傍に少しでも長く居たいって言うのが本音だ。

うーん、でもなあ……。

（お礼、考えてなかったや……）

最初はお金になるものを渡してあげようと思ったんだけど、それって今考えればすつごく失礼だよな。どうしよう……。

渡しても良いのかもしれないけど、そういう物とかを渡したらもうそれで終わりでしょ？

僕とカエデくんを繋ぐ糸は此处で途切れてはい終わり。やだなあ、それ。

んー……。……。あ。

（そうだ）

糸が無いなら、自分で新しく繋げれば良いんだ。

「ん！ 良かった、良かった！」

物凄く機嫌良さに笑った僕に、アーちゃんが訝しげな目を向けてくる。うん、よくわかってる。

こういう顔したときの僕のすることって、アーちゃんたちにとって良いことがあった試しがないもんね。

でも、大丈夫だよ、今回は。だって、アーちゃんだってカエデくんのこと、気に入ってるだろう？

「じゃあ、お礼っていうのは、アーちゃんを君のお嫁さんにするっていうことでどーお？」

「なっ！！ お、おと、お父様！？ な、何を言っておられるのですか！？」

「……は……、」

アーちゃんは顔を真っ赤にして僕を見上げた。カエデくんはちょっとだけその切れ長の瞳を大きくした。

此処まで驚くとは予想外。いやあ、自分に振り回される人間を見てるのって、なんだか気分が良いよね！

男と王（後書き）

可笑しいな、修正前と比べてウィルザの性格が大分悪くなった。

王族らしからぬ王族、好きです。

こういう感じの人が政務ちゃんをやってたらなんか良いよね。ギャップ萌えみたいな。

こいつは出来なさそうだけれども。

この作品をお気に入り登録している人は、っての見てみたらヤンデレものが凄く増えててビビりました。

SIDE カエデ

あれから俺は兵士さんたちに連れられ、入城した。

俺、お城って壁一面中に金箔とか張ってあって落ち着かない感じなのかと思ってたんだけど、そうじゃないんだね。

メイドさんたちや兵士さんたちと遭遇するたび、すっごく気まずい。皆こっち見てくれない。見てくれても一瞬。

国レベルの虐め受けたのなんて初めてだからすでに心が折れそうだ。

「此方が王の間になります」

「……………」

え……、いきなり？ なんにもなしにいきなり王様に会わせられちゃうの？

でも、ここまで来ちゃって帰りますだなんて言えないよね。うわ、心臓ばくばくいつてる。怖い。

いや、頑張るよ！ 仕方ない！ 俺も男だからね！ 腹括るよ！

…………ごめん嘘！ 誰か助けて！！

だけど、そんな俺の心の叫びに誰かが気付いてくれるわけもなく、王の間に繋がる大きな扉はゆっくりと開かれていく。

ああっ！ ホント待ってよ！ まだ手に入って三回書いて呑み込むのやってない！！

そう言おうと思つて後ろを振り向いても誰もいない。横を向いても誰もいない。

みんな移動早過ぎなんだけど！！ そんなに俺と一緒にいるのは嫌ですか！ ですよね！！

せめてもの抵抗で俺はゆつくりと歩みを進めた。かつん、かつんと耳障りな俺の靴の音が響く。

なんでかすつごく静かだからホント響く。ちょ、今だけ俺の足音消えてくれないかな。

やつとの思いで王様の前に出ると、王様は呆然としていた。

すいません！ 本当すいません！ 人間かと思つて待つてたら召喚されてたのはクリーチャーだったっていうね！！

俺が心底申し訳なく思つていると、王様はハツとした顔をして笑つてくれた。うわ優しい！

でもその愛想笑いが引き攣っているのは見ないふりをしておこう。挫ける。

「ねえ、君がアーちゃんの言つてた子かな？」

アーちゃん……？ 内心首を捻つているとそのことに気が付いたのか、この子のことね、と王様は横にいた女の子を示した。

王様イケメンすぎる！ なにこのフォーローの天才！ でもすいませんその子知らない！

……あれ？ でもなんか見たことあるような……。うん、此処は誤魔化しておこう。

「さあ……、」

……この受け答えはどっちかっていうと否定の意味になっちゃうかな……。

……あつ、待って。姫様にもしお会いしてたとして、それ覚えてないって最悪じゃない？

やっべ俺打ち首にされる！ これ絶対ばれたよね！ 誤魔化しきれてないよね！

その後愛想笑いたけど俺の不細工な顔じゃ誤魔化す事もできないよー！ 王様の顔引き攣ってるし！ すみませんね汚いもん見せちゃって！

「あ、僕の名前はウィルザ・フィルニアイル。君の名前はなんていうの？」

「っわ、わたくしはアーリアと申します！」

“君の名前を覚えてくれる？”と王様。

敢えて俺の顔には触れないとか王様もう素敵すぎる！ イケメンでフォロー出来て大人とかどういことなの！？

「……カエデ カエデ・クレハ」

「、カエデくんか。良い名前だね」

「カエデ様……ですか。良いお名前ですわね」

奇跡が起こったぞ皆の衆うつうつうつ……！！！！

王様が俺の名前褒めてくれたっていうのもそうだけど、あんな美少女に微笑みかけてもらえるとか!!

怖い! もう怖いよ! 後が怖い!! 上げて落とす作戦か!! ああでもやっぱ嬉しい! ちよつと今だけクリーチャーがによしちやうけど許してね!!

気持ち悪い笑みを晒しながらふと思った。

ところで俺って、なんで呼ばれたんだろう?

訊ねると王様は一言。“君が自分の娘を助けてくれたから”。…うん?

「……そんな大したことはしていない」

ていうか出来ないのほうか正しいかな。

それにお姫様助けたのって俺じゃなくて勇敢な誰かでしょ? 凄

いよなあ、俺には絶対真似出来ないし。

「いや、君はそうかもしれないけどさ、」

違うって言うてるのに、なんでか王様はどうしても俺をそのヒーローにしたいらしい。

いや、でも俺なんにもしてないから、お礼とかもらえないよ。心苦しい。

このままなんとか帰れないかな……。ちよつと困っていると、王様が王座から降りて俺のもとへやってきた。あ、やばい。斬られる?

「ね、駄目……かな？」

目が！ 目があああああ！！

やめて！ イケメンをそんなに無駄遣いしないで！！ 俺じゃなくてもっと使うべき相手がいるでしょ！？

ところで思ってたんだけど、王様の娘って横にいるそのお姫様のことだよな？

……王様若くね？ 二十代にしか見えないんだけど、どういうこと？

「……わかった」

居た堪れなくなり、俺はついに言ってしまった。ああああ！ すみません名前も顔も知らない勇敢なヒーローさん！！ 手柄を横取りって最悪だよ！

俺の返事に王様は嬉しそうにっこりと笑って、超ド級の爆弾を落とした。

「じゃあ、お礼っていうのは、アーちゃんを君のお嫁さんにするっていうことでーお？」

「なっ！！ お、おと、お父様！？ な、何を言っておられるのですか！？」

「……は……、」

し、真の爆弾魔はあなたでしたか！！

SIDE カエデ（後書き）

人物紹介

カエデ・クレハ

性別・男

一人称・俺

容姿・黒髪紅目の美青年。色白。年は二十歳くらい。

性格・チキンなのに何故か皆に良いほうに勘違いされてしまう可哀そうな人。大食漢。ぶっちゃけこの設定いらなかったと思ってる。

座右の銘・“平凡”。到底無理。

備考・顔はいいから密かにファンクラブがある。何処生まれだとかそういう事が一切分かってない。記憶喪失（実はあったもう一話を削ってしまったので初見の方はえっ！？ってなってると思う）。

アーリア・フィルニアイル

性別・女

一人称・わたくし

容姿・金髪に緑の目の美少女。くりくりした大きな瞳がチャームポイント。十代後半。

性格・ミイハーかもしれない。でもしっかりお姫様やってます。

先日の出来事・カエデファンクラブに入会。

備考・セルリア国の皇女。恋する乙女。カエデに助けてもらった後、カエデのファンクラブがあることを知った。あとは上記の通り。それで良いのか。

ウィルザ・フィルニアイル

性別・男

一人称・僕

容姿・金髪に深緑の瞳。見た目は二十代前半だけど、結構良い歳（化け物）。何が可笑しいのかいつもヘラヘラしてる。ムカつく。

性格・明るく、年の割に結構子供っぽい。極度の親馬鹿。微ナルシスト。

宝物・子供たちが産まれたときから撮ってきた写真がおさめてある

アルバム。

備考・セルリア国の王。カエデをアーリアの婿にむかえようとたくらんでいる。

見返してみるとウィルザの紹介だけなんか酷い気がする。

男へのお礼

そ、そんな……、こんな可愛い子を俺のお嫁さんにするとか許されるわけないでしょ！

王様予想以上に常識ない！ え？ なに、俺が頭可笑しいだけなの？

……いや、そんなことないはず。だいたい会ったばかりだし……。
やっぱりそういうことって、清く正しいお付き合いを重ねてから決めるべきだと思うんだよね。初めは文通。次にモールス信号ですよ。

俺のたった一人のお友達が言ってたよ。

文通は文が返ってくるまでのあのドキドキ感が堪らないって。

モールス信号は意思の疎通が出来るかどうか違う意味でドキドキするって。

「おつ、お父様！！」

今まで驚きとショックで固まっていた姫様が叫んだ。

ほらっ！ 見てよあの必死な顔！ 姫様だって嫌がってるじゃんか！！

「カエデ様にはわたくしなんて釣り合いませんわッ！！」

待って！ なに言ってるの！？ 今俺が想像した言葉と真逆の言葉が飛び出したような……！

ていうか逆だよね！ 俺が釣り合わないよね！

「そんなことないってアーちゃん」

王様が苦笑しながら興奮する姫様を宥めた。

王様！ もつと言って！ それでそのまま正気に戻って！

俺なんかを一族に迎えたら謀反されちゃうよ！ 一夜にして王国は崩れ去るよ！ 俺の顔面筋金入りだから！

「そんなことありますわ！」

王様の説得も空しく、さらにいきり立つ姫様。いや、あの、ちょっと落ち着いて！ なんでか俺すっごく居た堪れない！

姫様の大声に何事かと集まり始めた兵士さん、メイドさんの視線が痛い！ 見てないで助けて！ 誰か！！

「カエデ様は強く優しく美しい方なのですよ！？ わたくしなんか釣り合うわけがないじゃないですか！！」

ねえそれいったい誰なの！？ 姫様にどんなフィルターかけたら

俺はそんな人間になれるの！？

何を言っても聞く耳を持たない姫様に王様は困り顔だ。俺は羞恥で融けそう。融けていいかな？

「うーん……、それじゃ、カエデくんは？ カエデくんはどう思う？ アーちゃんのこと、悪くは思っていないでしょ？」

その言葉に姫様はピクリと反応して俺をじっと見つめた。

お、俺……？ 俺はどう思ってた、そりゃ勿論一つしか思うことないでしょ。

「……俺にはこの子を幸せにしてやれる自信がない」

あと俺には勿体無い。だってさあ、考えてもみてよ。明らか釣り合いとれてないじゃん。

片や一国のお姫様。片やヘドロ同然の俺だよ。全世界からブーイング食らうよ。

それに俺と結婚していったいなんの得があるの？ 習得できるスキルは精々クリーチャーの調教スキルくらいだよ。何処で役に立つんだよ、そのスキル。

そう言つと、姫様と王様はハツと目を見開いた。そう！ そうなんだよ！ やつと気が付いてくれた！？ 俺の無価値さに！

「そんなことはありません！ カエデ様と共に在れるだけでわたくし幸せですわ！ 幸せすぎて心臓が破裂しそうです！ 破裂しましうか！？」

しなくていいよ！！ しなくていい！！ 何処の殺人現場だよ恐ろしい！！ なに破裂しましたっけ！！ 俺そんなこと初めて訊かれた！！

王様もちよつとギョツとした顔で姫様を見てたけどすぐに俺に向き直って言った。

「そ、そっだよ！ 幸せに出来ないとかそんなこと考えなくたって大丈夫！ 家族の幸せは夫婦二人の手で掴みとるものでしょ！？」

ああ！ その言葉を言われたのが俺じゃなかったら物凄く感動したのに！！

そんな良い台詞無駄撃ちしないで！ 使いどころを見極めて！

ていうか、あれ！？ なんか話ずれてる！？

俺、幸せに出来る出来ないが気になるんじゃないで、それ以前に結婚はしないんだってば！！

「俺は人生に関わる大事なことを、簡単には決めたくない」

それに、今は結婚よりもしたい、大切なことがある、っていう言葉は呑み込んでおいた。

これは完全に俺個人の問題で、王様たちには関係ないことだしね。

……結婚とかってさ、人生の墓場なんて言われてるものだからね。俺も人並みに結婚生活に夢見てるけど、ちょっと怖い気持ちもあるんだ実は。

「……姫様は、とても素敵な女性だと思う。だから、ゆっくりお互いを知っていききたい」

それで現実を見て下さい。姫様は今夢見る乙女なお年頃だから全ての異性に夢見ちゃってるんだよ、きっと。

だから俺みたいな醜男にも変なフィルターかけて全くの別人に仕立て上げちゃったんだ。

「そう……」

王様はそれだけ言って目を伏せた。落ち込んでいるようにも、何かを考え込んでいるようにも見える。

なんだろう……。なんか王様って失礼だけど碌なこと言わなさそう。

「カエデくんは、ゆっくりりアーちゃんのこと、“知って”いきたいんだよね」

知って、の辺りを嫌に強調して王様は言った。ちよつと不安そう
な、期待したような瞳で姫様は王様を見つめている。

俺の知らないところでどんな話が進んでいるんだろう。俺、当事
者のはずなのに部外者みたいな疎外感を感じる。

「それじゃ、親睦を深めるって意味でお泊まり会しようよ！　ね、
良いよね！」

え、お城ってそんな簡単にお泊まり出来るの？　すっげえフレン
ドリー。良いね、平和だね。戦争起こらないね。

でも、そんなに急に泊まったら迷惑なんじゃ……。

うーん……、結婚は正直気が進まないんだけど、お泊まり会って
いう響きにはかなり心魅かれるものがある。

俺、誰かの家に泊まったことも、自分の家に泊めたこともないん
だよ。

人間に限らず言えば天井裏で鼠がいつも走り回ってるからある意
味お泊まり会は毎日してるんだけど。でもそんな寂しいお泊まり
会聞いたことないよね。

「そうですわ！　泊っていつて下さいー！」

こ、こんなに言われたら断るのは逆に失礼かなあ……。
姫様の言葉を後押しするように王様も続ける。

「うんうん！　あとご飯も豪華ですっごく美味しいよー！」

「ご、ご飯だと……！？ ええ、どうしよう！ 豪華で美味しいってどんなのが出るのかすごく気になる！」

俺が迷っているのに気付いたんだろう。王様はふふんと不敵な笑みを浮かべて、これで止めだと言わんばかりに口を開いた。

や、やめてええ！！ これ以上俺を誘惑しないで！ ご飯だけでも心がぐらぐらなのに、これ以上なんて……！

そんな魅力的な誘いを断るなんて俺には……！！

「今なら僕のサイン（ブロマイドつき）もプレゼント！」

……あつ、そういう……。

どうしようかな……。ご飯。美味しいご飯。食べたいなあ……。

「其処まで言うなら、一日だけ……」

俺の言葉に姫様は可愛らしく頬を染めてきゃあきゃあと喜んだ。そんなに喜ばれるとなんか照れるなあ……。

王様の目元にきらりと光る何かが見えた気がしたのはきっと気のせいだろう。

男へのお礼（後書き）

書いていただいた感想に興奮してなんとか今日中に一話だけでも修正終わらせて上げようと思った結果がこれだよ！！
文がなんか荒い気が……。勘違い要素、次はあんまりないかも……。

SIDE ウィルザ

あつ、アーちゃん恥ずかしがってる。かわいいなあ本当に！
さすが僕の娘だね！
アーちゃんの可愛さにちょっとにやけているとキツと鋭く睨まれてしまった。涙目だから可愛いだけで全然怖くない。

「おつ、お父様！！ カエデ様にはわたくしなんて釣り合いませんわッ！！」

えー、そんなことないのになあ、と思いながら口を挟む。
親馬鹿？ 知らないよ、そんなの。だって僕のアーちゃんが可愛い
いのって事実じゃないか。

「そんなことありますわ！」

うつん……、困ったなあ……。思わずため息を吐きそうになって
必死に呑み込んだ。
だって、今ため息なんて吐いたりしたら、アーちゃんもつと興奮
しちゃうでしょ。

うつん、だけど困った。これじゃあアーちゃんを説得するのは無理
そうだ。だけど、僕、カエデくんにお婿に来てほしいんだよね。

僕が楽しいってのもあるけれど、やっぱり可愛い自分の子供には
思い思われる仲の人と結ばれてほしいって思うじゃない。

僕、自分で言うのもなんだけど子煩悩だからね。アーちゃんたち
には幸せになってほしい。

仕方ない、此処はカエデくんに加勢してもらおう。アーちゃんだ
ってさすがにカエデくん相手に口答えは出来ないでしょ。

「アーちゃんのこと、悪くは思っていないでしょ？」

ね、そうだよ。わかるよ。僕、王様だし、それくらい見抜けな
くっちゃ、ねえ。

君は冷たいけど、優しい子だから、アーちゃんを無下に突き放す
なんてこと、しないよね？

「……俺にはこの子を幸せにしてやれる自信がない」

あれっ？　ってちょっと思った。嘘でしょう？　ってちょっと思
った。

……ねえ、僕、すつごく嫌なこと思いついちゃった。馬鹿げた考
えだって、笑ってくれる？　笑ってね。

カエデくん、優しい子だもん。僕のこと思いやってよ。

これでも老体なんだからね。少しでも強いシヨック受けたらすぐ
にぼっくりいっちゃうからね。

ねえ、君は優しい子だから、アーちゃんを傷つけないためにそん

な嘘を吐いているんだとしたら。

ねえ、その台詞、便利だね。“幸せにしてやれる自信がない”、なんて。だって、如何様にもとれるじゃない。

単に幸せにしてやれるだけの技量がないのか。

それとも、愛すつもりがないから幸せには出来ないなんて言うのか。

ああ、なんて酷いんだろう。訂正して良い？ 優しいっていう言葉。

でももつと酷いのはそういうふうに思っていててもアーちゃんの心を返してくれないこと。僕を惹きつけて止まないその魅力。

……あ、みんなが集まってきちやった。ごめんね、騒いじゃって。大丈夫だから戻っても良いよ。

「そんなことはありません！ カエデ様と共に在れるだけでわたくし幸せですわ！ 幸せすぎて心臓が破裂しそうです！ 破裂しましよつか！？」

落ち着いてね。僕は可愛い愛娘のそんな無残な姿を見たくはないよ。

アーちゃんはカエデくんの裏の思惑に気付く素振りなんて全く見せずに慌てふためいている。それにしてもアーちゃんお馬鹿だなあ。そんなところもまた可愛いんだけれど。

うん、ね、可愛いでしょ？ 愛さないなんてそんなこと有り得ない。無理矢理にでもその愛、アーちゃんに向けさせてあげる。

でも悟らせないよ。僕は王様だから、誰かに本心を悟らせないなんてこと、結構得意なんだよ。だから今はアーちゃんと一緒に馬鹿のふりをして騒いでいてあげる。

「俺は人生に関わる大事なことを、簡単には決めたくない」

うん、そうだね。僕もそう簡単に諦めるつもりはないよ。そう簡単に、アーちゃんの幸せを諦めるつもりはないし、君をみすみす逃すつもりもないんだ。

王の間の入り口のほうから熱い視線を感じて首だけを其方に向けた。其処にはメイド服を身に着けた可愛い可愛い僕の部下である少女が二人立っていた。

色んな意味を籠めた大丈夫をウィンクだけで伝えたと一人は僕を睨みつけ、一人は頭を下げてその場から去っていった。

……後で叱られちゃうかな。

「……姫様は、とても素敵な女性だと思う。だから、ゆっくりお互いを知っていききたい」

今まで違う方向に向けていた意識を此方に戻して、おや、思った。

「、あはっ……」

思わずにつこりとしてしまつてアーちゃんに不審そうな目で見た。あ、酷い。僕はこんなにアーちゃんの幸せのために頑張ってるのに。

……ね、ね、それよりもカエデくん。今の、気付いた？

君、すつごいミス犯しちゃったね。僕、それを見逃してあげるほど優しくないからね。弱味は付け込んでなんぼでしょ？

お互いを、知っていきたいんだよね。じゃあ、僕がその機会、作ってあげるよ。嬉しいよね。喜んでみせてよ。

如何にも“今、思いつきました！”みたいな顔をしてにつこり笑う。……か、カエデくんまでそんな目しないでよ。

「それじゃ、親睦を深めるって意味でお泊まり会しようよ！　ね、良いよね！」

答え？　訊くつもりなんてないよ。だって、僕が良いって言ってるんだから、僕がそうしようって言ってるんだから、そうしないのって可笑いじゃない。

こういうところが大人になってない、なんて他国の王から厭味を言われる所なんだらうけどね。

でも、それで良いんだ。自分の幸せの為に子供でなくちゃいけないって言うなら、ずっと子供でいるよ。

「そうですわ！　泊って言って下さい！-！」

アーちゃんは嬉々として僕の提案に乗った。ああ、そういう顔もすごく可愛いよ！ 手元にカメラが無いのが惜しまれる！

「うんうん！ あとご飯も豪華ですごく美味しいよ！」

お、駄目もと言ってみただけど、結構揺れてるなあ。ご飯、好きなんだ。

此処までぐらついてるんなら、あともう一押しだね。

よし、出血大サービス！ 全国民が羨む超プレミアグッズを君に贈呈しようじゃないか！

「今なら僕のサイン（プロマイドつき）もプレゼント！」

あ、無反応。

S I D E ウィルザ（後書き）

王族が病みすぎてて辛い。

私を書くときみんな病んでくる。どういうことなの、助けて。

実は此処の王族は回復魔法 白魔術的なものが得意っていう設定があるんですが、全然そんなふうに見えませんか。

逆だね。黒魔術だね。

男と王子

俺が城に泊まるということを承諾したあとに、ウィルザさんが言った。

あ、ちなみにこの呼び名はウィルザさんが“王様”は嫌だっ言ったから変えたんだよね。お父さんって呼んでも良いよとか言われたけど丁重にお断りした。

「こつちから泊まっていつてなんて言ったのになんだけど、部屋の手配が出来てないんだよね」

だから適当に城内を探索してきてくれ、と。

……うん、やっぱりね、こういうことになるんじゃないかって思ったよ。だっていきなり決めちゃったし。

やっぱり迷惑だったんじゃないかな。絶対メイドさんたちの好感度下がつてるよね。

恋愛げえむってやつで言う遭遇した途端に舌打ちされるくらい好感度が皆無（寧ろマイナス）だよな。

きつ、傷ついてなんかないんだからねっ！ あ、すいません。気持ち悪いね、俺。

それにしても、広いなあ……。しかも豪華。お城なんだから当たり前なんだろうけどさ。

床なんか埃一つありません！ って感じにぴっかぴかだし、さっ

きからシャンデリアの光が目にも痛い。

今ね、廊下を歩いてるんだけど、廊下だけでこんな豪華なんだよ。凄いやね。

あ、王の間は緊張しすぎてて部屋を観察する余裕はなかったんだ。

はあ……、俺、城に入るところか城の庭にだって入ったことないからなんか緊張するよ。

「おい」

迷ったりしたらどうしよう……。心配だなあ。

俺、方向音痴ってわけじゃないと思うけど、全然知らないところに一人ぼっぽり出されたら普通に迷う自信あるよ。

「おいっ」

ところでなんの脈絡もなく思ったんだけど、アーリア あ、アーリアも姫様は嫌だって言うから名前呼びにしてる。凄くない？
王族二人も名前呼びだよ。 には兄弟とかって、

「おいっ！！」

命だけは！！ いきなり聞こえた怒鳴り声にびくびくしながら振

り向くと、其処には美少年があられた。

え……、なにこれ。幻覚かな。こんな素敵な美少年が俺に話しかけてくるとかないよね。ないわ。

なんだろう、美少年の周りだけきらきらして見える。大量の薔薇が咲き乱れているように見える。美少年が薔薇なら俺の周りにはあれだな、ラフレシア。

端正な顔に彩りを加えているのはふわつとした橙色の髪。利発そうな深緑の瞳は鋭く此方を睨みつけている。

あれ……、なんかちよつとウィルザさんに似てる気も……。

「お前っ、誰だ……！」

あ、ごもつとも。

そうだよな！ 俺、丸つきり不審者だよな！ ウィルザさんたちがあれから城中に俺がいるっていうこと教えてないならただの不法侵入者だもんね！！

どっ、どっどどうしよう！ 追い出されちゃうかな！？

いつまでも動揺して見苦しい様を見せつける俺に苛立ったのか、美少年はギリッと歯軋りして大きく口を開いた。

「俺様の質問に答えろっ！！」

あつ、これもう土下座しかないかな。準備は万端だよ。いつでも床に膝つけれるよ。

いつ膝をつこうかと身構えていると、美少年の瞳は力強さをゆる

ゆると矢い、深緑は潤んだ。あ、あれっ……？

「無視、しないでくれよっ……」

な、なんで泣きそうなの！？

男と王子（後書き）

短め。

今回はカエデはちょっとだけ冷静かもしれない。
いや、やっぱりそうじゃないかもしれない。

SIDE 王子

今日、何故か俺様は親父に呼び出された。

なんだか呼び出された時点で嫌な予感しかなくて無視してやろうとも思っただが、呼びに来たメイドがかなり必死に頼み込むんだから仕方なく、仕方なく行ってやった。

親父の顔は見ていただけでいらついてくるからあんまり会いたくないんだけどな。

ぶちぶちと文句を言いながら王の間に向かった。

王の間の扉の前に立った途端、用も聞かせずに呼び出しやがったことに異様に腹が立った。

兵士たちの制止も聞かずに扉を蹴破ってやろうと渾身の力を籠めて蹴りを喰らわせる。開かないや。

おい其処の奴！！　なんだよ！！　笑うなら笑えば良いだろ堪えてんじゃねえよ！！　お前なんて失脚しちまえばーか！！

じんじんと痛む足を微妙に引き摺りながら親父を睨みつける。あれもこれも全部親父のせいだこの野郎！

「おい！　なんの用だよ！　下らないことで呼び出したんだっただじゃおかねえからな！！」

「ええっ！？　なんでそんな酷いことを言っんだいイヴリア！　君はもつと協調性っていうものを、」

「戻る」

「ああ！　待つて！　待つて！！　違うから！　そういうことを言

「いたかったんじゃないから！」

協調性だとかなんだとか、そんな下らない説教を聞かせるために俺様を呼び出しやがったのか、この男。

短く言い捨てて踵を返すと、酷く慌てた様子で俺様の足に縋りついてきた。プライドはねえのかあんた！！

「ッなんなんだよ！！ 言いたいことがあるならさっさと見えよ！」

そう言うつと奴はやつと俺様の足から離れ、立ち上がった。……埃ついてるぞ、汚い。メイドや兵士たちの視線を感じる。見てないでさっさと自分の仕事に戻れ、馬鹿。

「で、伝言を頼みたくて……」

「聞こえねえよ！ もつとはつきり言え！ なよなよしやがって気持ち悪い！！」

「伝言を頼みたくて！！！！！！」

「うるせえ黙れ！！！！！！」

あんまりにも大きな声出すもんだからいらついで平手を喰らわせてやった。少しだけすつきりした。

すつきりついでにその伝言とやらの内容も聞いてやろうときちんと向き直る。

「で？ その伝言つてのはなんなんだよ」
「う、うん……」

涙目で俺様が叩いたせいで赤くなった頬を擦る親父。……後でメイドに湿布でも持つてこさせるかな。

いや、心配してるとか、そんなんじゃないやねえし。あれだ、あの、く、食わせるんだよ。嫌がらせだよ。

「えっと、今、お客さんを招いてるんだけど、その子が泊まることになってね」

「てめえ俺様の意見も聞かずに勝手に勝手に決めてんだー！」

「え、ええ！？ イヴリアの意見も聞いたほうが良かったの！？

あれ！？ 王様は僕だよー！」

「ああ、はいはいそーですか！ 王だったら国民の意見も聞かずに政治を進めて良いのかよー！」

「話がすり替わってるよイヴリアー！」

ほんとと有り得ない。俺様だって此処に住んでるんだから、普通はちゃんと了解を取るだろ。

ばったり遭遇して気まづくなったりしたらどうするつもりだよ。

責任取れんのかよ。いや、でも城は広いし、会う確立なんて其処まで……、

「そ、それで、その人に会ったら部屋の準備が出来たって伝えてほしいんだ。あと、出来れば部屋にも案内してほしくて」

「ざけてんのかてめえー！」

滅茶苦茶会うじゃねえか！ 寧ろ俺様から会いに行つてんじゃねえか！

それから色々文句も言つたんだが、結局全て聞き流され、

「ふざけんなよ、あいつ……」

今に至る。廊下寒い。

嫌だつて言つたのに。人見知りを直せだとかなんだとか言つてやがったけど。

良いんだよ。俺様は外交の顔作るのは得意なんだから。

「特徴も教えやがらねえし、伝言のしようがないだろうが」

そう、あの馬鹿親父はあろうことか伝言を伝える相手の人相も名前も伝えずに俺様をほっぽりだしやがったのだ。見ればわかるってわかるわけねえだろ。

一度お祖母様の腹の中に戻って捨ててきた常識を拾ってくれば良いと思う。

……文句を言っただけでも仕方がない。無理矢理とはいえ頼まれてしまったのだし、客人にも迷惑がかかる。

というわけで、俺様は今、その“客人”を探しているのだ。
あの馬鹿は性別すら教えようとしなかったから本当にわからない。
見ない顔なんてこの広い城内じゃいくらでもいる。……あれ、本当
に見つかるとか、これ。

ふう、と一つため息を吐き、また親父への悪態をついていると、

「っえ……！」

闇が視界を過った。

ぞわりとした。なんだ、なんだ、あれ。

よく見れば、その闇は人間の男だった。いや、本当に人間なのか。
あの圧倒的なオーラは、いったいなんなんだ。

怖い。怖い。恐ろしい。だからこそ、

「っおい」

俺様を、見てほしかった。

どうしてそんなことを思ったのかなんて、そんなのはわからない。
理屈じゃなくて、そういうの、どうしてもよくって、ただただ俺様を
見てほしかった。

ああ、情けないくらい声が震えてる。馬鹿みたいだ。それくらい、
恐ろしかった。

もしこの男の気に入らないことをしてしまえば、俺様は一瞬で消されるんだろう。

それを想像してしまうと体が竦み上がって、声を出すのもやっただった。

「おいっ」

気付いてるんだろう？ 俺様が此処にいることに。なあ、なあ、なあってば。どうしてこっち見てくれないんだよ。

見て、見て、見て、見てよ、こっち。

「ッ……おいっ！！」

今までで一番大きな声を出したとき、その男は漸くゆったりとした動きで此方を向いてくれた。

「あ、っ

」！

息を呑むとはこのことかと、身をもって思い知った。

なあ、あんた、本当に人間なのかよ。ぬばたまの黒髪。夕陽じゃない。ルビーじゃない。そんなもの比べ物にもならないくらいに輝く美しい、紅。

「……………」

男の冷たい紅に貫かれた瞬間、俺様は全てを悟った。絶望的な実力の差と、彼の思惑に。

彼は面白がっているんだ。俺様が彼の行動に一喜一憂してるのを、面白がっているんだ。

その証拠にあなたはうつすらと綺麗な笑みを浮かべている。だけど、彼が此方を向いて下さったことのほうが嬉しくって、俺様を見て下さったのが本当に嬉しくて、遊ばれているんだとしても、それでも良いと思った。

「お前っ、誰だ……！」

ああ、違う！！なんでそんなこと言うんだよ俺様の口！！思わず自分の口を縫い付けてしまいたくなった。

“お前”？ “誰だ”？ なんて生意気な口をきいているんだ！！どうしよう！！ どうしよう！！ 違う、違うんだ。ねえ、違う。だけど、彼は気分を害した様子も無く、ただただ俺様を見つめていた。その瞳に失望が映るのが怖くて、目を直視出来ない。

「俺様の質問に答えろっ！！」

泣きたい！！ 本当にこういうとき、素直になろうとしない自分の性分がムカつく。

だけど、叫んだその言葉に偽りなんて一つもない。彼という存在を、俺様は一刻も早く知りたい。

切実な感情を籠めて訴えても、彼は俺様の質問に答えないうずつと俺様を見つめている。

答える価値もないのですか。無価値な俺様には、“あなた”を教えるは下さらないのですか。

酷い。こんなに惹きつけるのに。

「無視、しないでくれよっ……」

じわり、視界が滲む。何も見えない。だけど、紅だけはさらにその存在感を増しているようにも思えた。

S I D E 王子（後書き）

綺麗な笑みっていうのは多分あれですね。カエデの顔が緊張のしすぎてちょっと引き攣っちゃってる感じ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5336z/>

(精神的に)最弱な男の(周りが)最強伝説

2011年12月30日22時45分発行